

多良間方言の動詞連体形のテンス・アスペクト

下地, 賀代子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

30

(開始ページ / Start Page)

183

(終了ページ / End Page)

210

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012542>

多良間方言の動詞連体形のテンス・アスペクト

下地 賀代子

はじめに

近年、テンス（時制）研究の進展とともに、アスペクト（相）についての研究もめざましい発展を見せている。それは日本の言語学においても同様で、いわゆる現代共通語（以下単に共通語）に限らず、各地方言のテンス・アスペクトについても、盛んに研究が行なわれている。だが琉球諸方言については、音韻や語彙、その他の文法的カテゴリーに比べると、テンス・アスペクトに関する研究は決して多いとは言えない。それは、本研究の対象言語である多良間方言についても当てはまることであり、本稿では、その多良間方言のテンス・アスペクトの、特に、文の連体の位置における諸形式の意味・用法について、記述していく¹。

1. 多良間方言の基本的なテンス・アスペクト体系

拙論2005では、多良間方言のテンス・アスペクトについて、文の終止に位置する動詞を対象として、それぞれの形式のもつ意味・用法を記述し、以下の表1のような体系化を試みた。

テンス アスペクト	非 過 去		過 去	
			普通過去	直前過去
完成相	ri語尾形	kakī ス(シ)	kakītaL シタリ	kakīqta(L) シアリタリ
	(ari形)	—	kakī: シアリ	—
	m語尾形	kakīM シーム	kakītaM シタリーム	kakīqtaM シアリタリーム
継続相	融合形	kakī:L シアリヲリ	kakī:taL シアリヲリタリ	—
	分析形	kakī: buL "	kakī: butaL "	

表1 多良間方言のアスペクト・テンス体系表（代表形kakī「書く」）²

過去形について、完成相は、タリ形・アリ形の〈普通過去〉とアリタリ形の〈直前過去〉という、実現するテンス的意味の違いによって大きく二分されるが、このうち〈直前過去〉は対立する継続相の形式を持たないことから、アリタリ過去形はアスペクトの対立に参加していないと捉えられる。また、継続相について、その2つの形態的要素の

融合の有無によって、融合形と分析形の2種の形式が現れている³。多良間方言では、そのほとんどの動詞が両方の形式を形づくることができ、かつ、それぞれに置きかえられることから、両者は併用されていると言える⁴。以下、それぞれの形式の意味・用法も簡単にではあるが示しておこう⁵。

1-1 完成相非過去形

1) 限界に到達する動き；〈基準時点以後＝未来〉のテンス的意味を表す。基準時点が発話時＝現在の場合に限られた、限界動詞によって実現されるアクチュアルな用法である。

1. namakara izü: jaki.

今から 魚-を 焼く

2) 動作の発生；〈基準時点以後＝未来〉のテンス的意味を表す。1)同様、その基準時点は発話時＝現在に限られており、無限界動詞によって表される。

2. “sju:, sju:, no:-gara:-nu-du nuNdi: ki:”-ti,

爺 {主} 爺 {主} 何-やら-の-ぞ 出て くる-と

「おじいさん、おじいさん、(穴から)何かが出て来る(よ)」と、

3) 現在の状態；知覚動詞（一部を除く）や感覚動詞、存在動詞などによって表される、アクチュアルな用法である。

3. “agai, ikimusü-nu Mme-nu kui-nu-du kikaiL. piNna munu”-ti,

[感] 生き物-の [P1.]-の 声-の-ぞ 聞こえる 変な もの-と

「おや、動物たちの声が聞こえる。変だな」と、

4) 全体的な出来事の意味；〈基準時点以後＝未来〉のテンス的意味を表す。基準時点は基本的に不特定だが、時間の状況語や文脈などによって特定されている場合もある。

4. agai, Mme ure-u si: nu:siL.

[感] もう それ-を して 乗せる

ああ、もうそれ {note.お手玉を上を投げる} をして (手に) 乗せる (んだね)。

5) 一般的なコトガラ；完成相非過去形に限られた、非アクチュアルな用法である。

5. “jana fucë: du:-Nke:-du ma:L.” [諺]

嫌な 口-は 自分-へ-ぞ 回る

「悪口は自分に回る (ft. 戻る)」

6) 反復的な動き；繰り返される動きや習慣的な動作を表す、非アクチュアルな用法である。

6. ukina:-mai, zju:rukunicu-ti:-ja sī:. ↗

沖縄-も 十六日-と-は する

また、多良間方言の完成相非過去形は、共通語のスルとは異なり、〈変化の結果の継続〉や、〈過去〉の全体的な出来事の意味など、継続相や完成相過去形と同様の文法的意味を実現することもできる。

7. ××-nu qvaga, Nna: Mmaga-nu-du nama kī:.

[屋号]-の [言誤] [間] 孫-が-ぞ 今 来る

[屋号] の、ええと、孫が今来る (ft.来ている)。{note on line.「孫」は既に表現主体の眼前に座っている。}

8. sju: jari: wa:L-taqra, are taro:, we uma-kara: ki:

主-Ø やり なさった(方)-は [感] 太郎 [間] そこ-から 来て

kadi-da, -ti M:-mai kadisi.

掘りなさい-と 芋-も 掘らす

(そこの) おじいさん (を) やりなさった (方) は (ft.おじいさんでいらっしゃった方は)、ほら太郎、そこからきて掘りなさい、と芋も掘らせる (ft.掘らせた)。

1-2 完成相過去形

- 1) 限界に到達した動き；〈基準時点以前（直前）＝過去〉のテンス的意味を表す。限界動詞によって実現されるアクチュアルな用法で、その基準時点は発話時＝現在である。なお、この用法はアリタリ形によって実現されるのが普通である。

9. zjo, barifuci-mai tatiqta. kuma-kara.

[感] 割り口(?)-も 立てた ここ-から

割り口 {note.前回からの仕事の続きを始める場所のこと} も決めた。ここから。

- 2) 動作の発生；〈基準時点以前（直前）＝過去〉のテンス的意味を表す。無限界動詞によって表され、その基準時点は発話時＝現在である。やはり、アリタリ形によって表される。

10. aNsiqte:, “Mme ikiqta na.” “ara-N, muqtu ika-N”. ~⁶

そうして もう 行った ね ではない 全然 行かない

そうして、「もう行ったね?」「いいえ、全く行かない」

11. “aha:, umuidasiqta. ‘meN’-ti:nu kutuba-du a-taL”-ti:,

[感] 思い出した メン-との 言葉-ぞ あった-と

「ああ、思い出した、‘メン’という言葉（が）あった」と、

- 3) 全体的な出来事の意味；〈基準時点以前＝過去〉のテンス的意味を表す。基準時点は基本的に不特定時だが、時間の状況語や文脈などによって特定されている場合もある。過去形のいずれの形式によっても表される用法である。

12. uL-ga uja-ga-du kī-taL-ti: jo:.

それ-が 親-が-ぞ 来た-と よ

その子の父親が来たってよ。

13. ke, kanu sīta-nu kata kare nu:-N, marubi:.↗

[間] あの 下-の 方 あれ-は 何-に? 転んだ

あれ、あの（脚の）下の方、あれは何（に?）、転んだ?

14. hai, harue: wa:riqta.↗

[感] ハルエ-は いらっしやった

ねえ、ハルエ（さん）はいらっしやった?

- 4) 過去の状態；存在動詞によって表されるアクチュアルな用法である。なお、非過去形の〈現在の状態〉と対称的なものではなく、知覚動詞や感覚動詞、生理・心理的な状態を表す動詞の完成相過去形はこの用法を表さない。

15. kicigi qfa-nu Mme-nu butaqra:.

綺麗な 子-の [Pl.]-の いた-ね

（あの家には）綺麗な子供たちがいたね。

- 5) 反復的な動き；過去に繰り返された動きや習慣的に行われた動作を表す、非アクチュアルな用法である。なお、アリタリ形はこの意味を表せない。

16. ziro:-ja kinu:, taro:-ju nikai baqzju:-taL.

次郎-は 昨日 太郎-を 2回 殴った

1-3 継続相⁷

- 1) 動作の過程の継続；基準時点と関係付けられたアクチュアルな用法である。無限界動詞と主体の動作を表す限界動詞はその動作の継続を、対象に変化をひきおこす動作を表す限界動詞は⁸「限界に方向づけられた過程の継続」（須田2003：26）を、それぞれ表す。また、過去形は〈基準時点以前＝過去〉を、非過去形は基本的に〈基準時点（同時）＝現在〉のテンスの意味を表す。

17. “a, kare: nu:-ti-ga īzi:L-ga”-ti Mme kiki:,

[感] あれ-は 何-と-か 言っている-か-と もう 聞いて

「あ、あれは何と言っているのか」ともう（それを）聞いて（そう思って）、

18. “nusītai, aNsi: uipītu-nu osoi jikaN: tamunu: bari: wa:ri:L-ga”

どうして そのように 老人-の 遅イ 時間-に 薪-を 割り なさっている-か

「どうして、そのようにお年よりが遅イ時間に薪を割りなさっているのですか」

19. “qva: nu:-ti-ga:, e:gu-gama-uba uqtu-ba muri:taL”-ti ī:-ba,

あなた-は 何-と-か 歌-[指小]-をば 弟or妹-(を)ば 子守していた-と 言う

「あなたは何と歌を (ft. 何と歌って) 妹を子守りしていたのか」と言うと、

20. aNna: nakada-N-du suika-u kisi: wa:ri:-taL do:.

母-は 台所-に-ぞ スイカ-を 切り なさっていた よ

お母さんは台所でスイカを切りなさっていたよ。

- 2) 変化の結果の継続；主体の変化を表す限界動詞によって表される、基準時点と関係付けられた、アクチュアルな用法である。基準時点において、その変化の結果の状態（限界到達後の状態）の継続段階にあることを表す。1) と同じく、過去形は〈基準時点以前＝過去〉を、非過去形は基本的に〈基準時点（同時）＝現在〉のテンス的意味を実現する。

21. aidia-u Ndasī-taL pītu sini: wa:ri:L.

アイディア-を 出した 人-Ø 死に なさっている

（その本の）アイディアを出した人（は）死になさっている。

22. aki-ga, ××aki-ga jumi-N nari:,-taL.

アキ-が [屋号]アキ-が 嫁-に なっていた

（あの子は）アキの、[屋号]アキの嫁になって、いた。

- 3) 基準時点における状態；知覚動詞（無意図的）や感覚動詞、生理・心理的な状態を表す動詞などに見られる用法である。基準時点において、その動詞によって示される状態の継続段階にあることが表される。また、多良間方言では、存在動詞/aL/にも形態的なアスペクトの対立が現れており、よって、その継続相/ari:L, ari:taL/も、この用法を示している。

23. cibusī jami:L, ↗ aNna.

膝-Ø 痛んでいる 母

膝（が）痛んでいる？お母さん。

24. aN-ja kaeqte joNzju:ku: be:-tu ume:-taL @ rokuzju:ici-ti:.

私-は カエッテ 49 (～の)者-と 思っていた 61-と

私はカエッテ49（歳）の者と思っていた。61（歳の午年）って。

25. hai, are muko:-ni, ×, ××-nu ari:L dara:na.

[感] アレ 向コウニ [言淀] [屋号]-の ある, [融継] だろう

ねえ、（あの家の）向コウニ（は）、[屋号]があるでしょ。

26. aL pītu-nu-du:, aL hoNja-Nke: hoN ko:ga-ti ikiqte:, hoNdana-u

ある 人-の-ぞ ある 本屋-へ 本-Ø 買いに-と 行って 本棚-を

mi:L-badu, nara-ga uNsjuku-N nuzumi: buL hoN-nu ari:-taL-ti:.

見ると 自分-が うんと-に 望んで いる 本-の あった, [融継]-と

ある人が、ある本屋へ本（を）買いにと行って本棚を見ると、自分が大変に望んで

いる本があったって。

- 4) 反復的な動き；複数主体の動作や多回的な動作、習慣をあらわす（「非連続的な過程の明示」）。完成相の場合と同じく〈個別的な時間〉から解放された非アクチュアルな用法である。

27. ~ti:nu panasī-mai-du, muksje: ari:, hoNto: kure:, uNsi:nu
 -との 話-も-ぞ 昔-は あって 本当 これ-は そのような
 panasē: ju:-du kiki: buL,
 話-は よく-ぞ 聞いて いる

～という話しも昔はあって、本当（に）これは、そんな話は（昔から）よく聞いている。

28. uL-ga Mme, kunu tujumiganasē: we: kuma-Nka-nu tujumiganasī,
 それ-が もう この 豊見親加奈志-は [間] ここ-に-の 豊見親加奈志
 ari: wa:L-badu, Mme kaje: wa:ri:-taL-ti:

であり なさる-ので もう 通い なさっていた-と

それがもう、この豊見親加奈志は、ここの豊見親でありなさるので、もう（その妾のところに）通いなさっていたって。

2. 連体形のテンス・アスペクトの形式

多良間方言の動詞は、その活用の仕方によって、強変化タイプ（Ⅰ類）、弱変化タイプ（Ⅱ類）、特殊変化タイプ（Ⅲ類）の3つが区別されている。そして、その連体形は、活用タイプごとにやや異なる形式を示している。

強変化タイプ（Ⅰ類）には、その語幹が子音で終わる動詞が属している⁹。主に、古典語の「四段活用動詞」に対応するが、/ki:L/（蹴る）や/iziL/（入る）など、「一段活用動詞」に対応する動詞もいくつか含まれている。このタイプの動詞の完成相非過去・連体形（以下完成相・連体形）は、表1の完成相非過去 ri 語尾形（以下完成相・終止形）と同音形式で現れる。また、「ラ行変格活用」の存在動詞に対応する/aL/（ある）と/buL/（いる）もこのタイプ（C）に属するが、多良間方言の継続相（非過去形）は/buL/をその形態的要素の1つとしており、よって継続相非過去・連体形（以下継続相・連体形）は、表1の継続相非過去形（以下継続相・終止形）と同音形式である。なお、分析形、融合形共に現れている。

また、完成相過去・連体形、継続相過去・連体形も、それぞれ、表1の完成相普通過去 ri 語尾形（以下完成相過去・終止形）、継続相過去形（以下継続相過去・終止形）と同音形式である。

A ; /kaki/（かく）、/kugi/（漕ぐ）、/tubi/（飛ぶ）、/kaqvi/（被る）、/cuqfi/（作る）、

/kīsī/ (切る)

ex. i:ju kakī (絵をかく) — i:ju kakī pītu (絵をかく人)

A' ; /macī/ (待つ)、/mucī/ (持つ)、/ī:/ (言う)

ex. aMju mucī (網を持つ) — ziN mucī zaisaNka (金持ち(の)財産家)

B ; /nasī/ (生ず)、/kiqzī/ (削る)、/fuqci/ (移る)

ex. qfau nasī (子を生ず) — qfau nasī tukī (子を生ず時)

C ; /tuL/ (取る)、/buL/ (いる)、/ki(:)L/ (蹴る)、/naL/ (なる)、/nu:L/ (のぼる、乗る)、/nuM/ (飲む)、/aM/ (編む)、/cīcīM/ (包む)

ex. kumaN buL (ここにいる) — taramaN buL pītu (多良間にいる人)

D ; /fu:/ (食う)、/umu:/ (思う)、/baru:/ (笑う)

ex. ju:igamau fu: (夕飯を食う) — fu: munu (食う物)

D' ; /nigu:/ (願う)、/usunu:, (usuno:)/ (失う)、/kau, ko:/ (買う)¹⁰

ex. izü:kau/ko: (魚を買う) — kau/ko: munu (買う物)

継続相非過去形

ex. funiu kugi: buL (舟を漕いでいる) — funiu kugi: buL izaku (舟を漕いでいる権)

過去形

ex. paLNke:ikītaL (畑へ行った) — hoN ko:ga ikītaL pītu (本を買いに行った人)

hoNju muti: butaL (本を持っていた) — muti: butaL izjara (持っていた鎌)

弱変化タイプ (Ⅱ類) には母音終わりの語幹をもつ動詞が属している。主に、古典語の「(上)一段活用動詞」と「二段活用動詞」に対応しているが、その完成相・連体形は、必ずしも完成相・終止形と同音形式であるとは限っておらず、その文の中で実現されるその(文法的)意味の違いによって、異なる形式をとって現れているようである。すなわち、〈基準時点以後＝未来〉の動作を表している場合の完成相・連体形は完成相・終止形と同音形式であるのに対し、そうでない場合はそれと異なる形をとって現れている(3-1 参照)。但し、これらの現れ方には揺れや個人差があり、原則的とはまでは言えないようである。なお、「ナ行変格活用動詞」のシヌに対応する/siniL/ (死ぬ) もこのタイプに属している。

「(上)一段活用動詞」対応 ; /mi:L/ (見る)、/ki:L/ (着る)

ex. terebiu mi:L (テレビを見る) — ure: mi:L munu (それは見るもの)

cf. “tiN mi: garasja” (天を見る鳥 [諺])

「二段活用動詞」対応 ; /ukiL/ (起きる)、/tamiL/ (ためる)、/kaNgaiL/ (考える)

ex. ziNju tamiL (お金をためる) — mizü: tamiL kami (水をためる甕)

cf. “ziNja tami sjo:bu” (お金は貯める勝負 [諺])

特殊変化タイプ(Ⅲ類)について、「カ行変格活用動詞」にクルに対応する/*kĩ:*/ (来る)、「サ行変格活用動詞」の*スル*に対応する/*sĩ:*/ (する) の2つがこのタイプとなる¹¹。これらの動詞の完成相・連体形は、完成相・終止形と同音形式である。

ex. inanudu kumaNke: kĩ: (犬がここへ来る) — kumaNke: kĩ: pĩtu (ここへ来る人)

sĩgutu: sĩ: (仕事をする) — sũgutu: sĩ: pĩtu (仕事をする人)

以上、多良間方言の連体形の形式は、次の表2のようにまとめられる。

		同形型	異形型	推量形型
完成相・連体形	I 類＝強変化	kakĩ	—	kakazĩ:
	II 類＝弱変化	mi:L	mi:	mi:zĩ:
	III 類＝特殊変化	sĩ:	—	sju:zĩ:
継続相・連体形	[融合形]	kaki:L	—	—
	[分析形]	kaki: buL		
完成相過去・連体形		kakĩtaL	—	—
継続相過去・連体形	[融合形]	kaki:taL	—	—
	[分析形]	kaki: butaL		

表2 多良間方言動詞連体形の形式

それぞれの「終止形」と同音形式であるものが「同形型」、異なるものが「異形型」である。また、上では触れなかったが、多良間方言では〈勧誘・意志〉、〈推量〉のムード的意味を表す形式も、文の連体の位置に現れることができる。これを「推量形型」と呼ぶ。この形式は完成相・連体形にのみ見られる形式である(3-1の例33, 34参照)。また、継続相について、非過去形、過去形ともに、融合形と分析形の両方が現れている。

3. 連体形のテンス・アスペクト的な意味

以下、多良間方言の動詞が、文の連体の位置においてどのようなテンス・アスペクト的な意味を実現しているのかを、それぞれの形式ごとに記述していく。そして、文の終止の位置において動詞が実現するテンス・アスペクト的な意味との異同関係を明らかにし、その体系化を試みる。また、連体形の動詞のテンスには、その動詞が表している動作が、発話時を基準として、時間的に位置づけられているものと、「文の終止の位置の動

詞がさしだす動作が実現した時点を基準として」(須田2005:16)、時間的に位置づけられているものとがあり、前者を「絶対的なテンス」、後者を「相対的なテンス」と呼ぶ。

3-1 完成相・連体形

1) 実現する動き¹²；〈基準時点以後＝未来〉のテンス的意味を表す、アクチュアルな用法である。基本的に、「時間的に関係づけられた動作が文の中にない場合」(須田2005:16)、すなわち、文の終止の位置の動詞(以下述語動詞)が無い場合は絶対的なテンスが(例29, 30)、そうでない場合は相対的なテンスが表される(例31)。また例32は、述語動詞が動作主体＝話し手の〈意志〉を表していることから、絶対的なテンスを表していると考えられる。

29. hai, uL piraki pa: ne:N na. hai kunu ami jo:.
 [感] それ-Ø 開く 葉-Ø ない ね [感] この 雨 よ
 ねえ、それは開く葉(は)ないよね。ああこの雨よ。{note.雨のないことを嘆いている}

30. si: Mme ataL. kiNjo: asato jaL munu.
 [感] もう 合う 金曜 明後日-Ø やる もの
 そうね、もう合う(ね)。(その法要は)金曜、明後日(に)やるもの(だから)。

31. qfaMmaga iqtaru-made kuma-Nka-kara nuNdi:L qfaMmaga-nu Mme:,
 子孫-Ø 至る-マデ ここ-に-から 出る 子孫-の [Pl.] -は
 pïtu-mo, sukosimo, Nna, jizimi-mai sirariN, cja:gaL, cja:gaL-ba
 人-モ 少シモ [間] いじめ-も されない 伸びる 伸びるの-を
 si: ikï-tu nara-ga tasuki, uzigami-ti: Nna:, Nna:, su: si:,
 して いく-と 自分-の 助け 氏神-と [間] [間] する して
 Nna, si: iki-ti:nu juiguN-ba si: wa:L-taL-ti:.
 [間] して いけ-との 遺言-を し なさった-と
 子孫(に)至るマデ、ここから出る子孫らは、人モ(に)、少シモ、いじめもされない、自分の助け(によって)伸びていくから、(自分を)氏神としていきなさい
 {note.祀っていきなさいということ} という遺言をしなさらって。

32. kunu si:niN-ja uduruki-u si:, “nubasi:mai tasuki: wa:ri. wa:L
 この 青年-は 驚き-を して どうしても 助け なされ おっしゃる
kuto:, nubasinu kutu-mai kanarazu sjugzi:”-ti,
 こと-は どのような こと-も 必ず しよう-から-と
 この青年は驚いて、「どうしても助けて下さい。おっしゃることは、どのようなことでも必ずしますから」と、

また、完成相・連体形にのみ見られる「推量形型」（表2）は、〈基準時点以後＝未来に実現する動作〉というテンス・アスペクト的な意味を実現する用法のみを示している。現在までのところこの形式は、絶対的テンスを表している用例にのみ現れている。

33. jagate kju:zju: narazi: pitu-nu. @

やがて 90-Ø ならう 人-が

やがて90（歳に）なる人が。[こんなにも元気でいらっしやる、と続くニュアンス]

34. “futa:L-ga naka-N, pi:sja:-Nke: Mbaizi: pitu-tu-du ika-zi:”-ti

2人-が 中-に 寒さ-へ 耐える[推] 人-と-ぞ 行こう-と

katare:,

相談して{語って}

「2人の中で、寒さへ（^{ft}に）耐える人と行こう {note:結婚すること}

して、

2) 継続的な動作・状態；〈基準時点（同時）＝現在〉のテンスの意味を表す、アクチュアルな用法である。共通語のスル連体形とは異なり、多良間方言では、（客体の変化を伴う場合も含めて）主体の動作を表す限界動詞と無限界動詞、そして、主体の変化を表す限界動詞によっても、このテンス・アスペクト的な意味は実現される。後者の場合、基準時点においてその変化の結果の状態（限界到達後の状態）にあることが表されるわけだが、この用法は完成相・終止形にも現れていたものである。

○動作の継続

35. wa:ritqti:-du, kiM-ba a:ri: wa:L tukuru-Nke: Nna:, mumu-nu, ʔ

いらっしやって-ぞ 着物-を 洗い なさる ところ-へ [間] 桃-が

momo jo, sore-ga garaNgaran-to, N:, nagarete kita. juri:

モモ よ ソレ-ガ ガランガラント [間] 流レテ 来タ 揺れて

ki-taL, -ba, oba:-ja uL-u: muti wa:ri:,

来た-ので オバー-は それ-を 持ち なさって

（洗濯に）いらっしやって、着物を洗いなさる（^{ft}洗いなさっている）ところへ、桃が、モモよ、ソレガ、ガランガラント、流レテキタ。揺れて来たので、おばあさんはそれを持ちなさって、

36. kuNgeN-ja, “qvata-ga asubi sugata:, Nda kuda-N, nu:-ju si:

クンゲン-は あなたたち-が 遊ぶ 姿-は どこ ここ-に 何-を して

buL, -ti:-gami-mai, sjarasjara sja:mi”-ti:,

いる-と-[強意]-も [擬態語] だよ-と

クンゲンは、「あなたたちが遊ぶ（^{ft}遊んでいる）姿は、どこそこで、何をしている

とまでも、はっきりだよ {note.よく見えるということ}」と、

○変化の結果の継続

37. kunu futacuga:mura: raibjo:kaNzja-nu sjuru: tukuru.

この フタツガー村-は ライ病患者-の 集まる 所

このフタツガー村はライ病患者が集まる (ft.集まっている) 所。

38. piguL mizi-nu ne:N na.↗

冷える 水-が ない な

冷える (ft.冷えている) 水が (ft.は) ないね？

39. a, ho:geN-ju nara:-ti ku: pitu-Nke: kanarazu kjo:cu:go-u

[感] 方言-を 習おう-と 来る 人-へ 必ず 共通語-を

sju:-zi:-ti-ba buL.

しよう-と-？ いる

あら、方言を習いたいと来る (ft.来ている) 人へ、必ず共通語を使おうという。

{note.どうして～するのか、という注意するニュアンス}

- 3) 基準時点における状態；無意図的に知覚された現象の状態や生理・心理的な状態を表す動詞、また存在動詞などによって表される。完成相・終止形にも見られる、アクチュアルな用法である。

○無意図的に知覚された現象の状態 (知覚動詞)

40. kikü: mucikasigi ge:rai. pitui idiqti:-du nara:sutari: ju. idi:

聞くの-は 難し気 だろう 1回 出で-ぞ 習わしたから よ 出で

kitari: weNsi: pikaiL tukuru:ba piki:, agiraiL tukuru:ba

来たから このように 引ける ところ-をば 引いて 上げられる ところ-をば

agiL, mata sjagi: kike: tukuru:ba sjagiL-ti:-ja, simisimi si-taL.

上げる また 下げて 聞こえる ところ-をば 下げる-と-は させさせ した

(この歌は) 聞くのは (ft.聞くと) 難しそうね。(その歌手が) 一度 (TVに) 出で教えたんだよ。出で来たから。こう引けるところは引いて、上げられるところは上げる、また下げて聞こえるところは下げると、させたりした (ft.していたよ)。

○生理・心理的な状態

41. misita:L-ga naka-kara, bikiduM-ju nuziM pitu-nu, miutu: si:

3人-が 中-から 男-を 望む 人-の 夫婦-を して

ko:fukuN kurasī-taL-ti:.

幸福に 暮した-と

3人の中から、(その) 男を望む (ft.好いている) 人が、夫婦をして (ft.夫婦になっ

て) 幸福に暮らしたと。

42. p̄goro: M:na-N-ja sicibumunu-nu, naNzju
 日頃-は 皆-に-は 七分者-の あまりよくない
umukutu-nu ne:N-daki-ni mi:raiL p̄tu aLgadu,
 知恵{思う事}-の ない-だけ-に 見られる 人 であるけど
 日頃は、皆には七分者の (ft.で) あまり良くない、知恵がないように見られる (ft.
見られている) 人だけど

○存在動詞

43. aNsibadu, kanagai-kara, usi, nu:ma-nu Nna:-nu, karamaki:-taka:
 だから 昔-から 牛 馬-の 縄-の 絡まっていたら
 ta:-ga usi, nu:ma arabaM, no:si:, naL-tika:, fusja-nu aL
 誰-が 牛 馬 であっても 直して なるなら 草-の ある
tukuru-Nke: p̄kima:si-du, kaMganase: mi: wa:L-ti:nu munu.
 所へ 引き回す-ぞ 神加奈志-は 見 なさる-との もの
 だから、昔から、牛、馬の縄が絡まっていたら、誰の牛、馬であっても、直して、
 なるなら (ft.できるなら)、草がある所へ引いて行く、(それを) 神様は見なさると
 のもの (ft.見ていなさるということだ)

また、/gagaL/ (やせる) や/qfaiL/ (太る) のような、「ながい時間のなかで進行する
 ような」場面外の変化をあらわす動詞 (須田2003:27) の完成相・連体形は、動作
 (変化) 性が薄れ、単に基準時点における状態を表していると考えられる。また、例45
 の連体形動詞/qsi/ (知る) についても同様のことが言えるだろう。動作 (変化) 性の薄
 まりによって、これらは、被修飾名詞が示しているコトガラの属性を表すという、非ア
 クチュアルな用法に近づいている。

44. kure:, kunu de:N cju:sja:-taL usi-mai, gagari usi-mai, usi-Nke:
 これ-は この とても 強かった 牛-も 痩せる 牛-も 牛へ
 MmariL mai-ja niNgiN-du a-taLrugadu, kunu qfai usi-nu de:N
 生まれる 前-は 人間-ぞ あったけど この 太る 牛-の とても
 cju:sja:L usē:, kunu gagari usi-Nke:, niNgiN: Mmari: buL
 強い 牛-は この 痩せる 牛へ 人間-に 生まれて いる

 kuru-N, uqka-nu a-taLru-gadu,
 頃-に 借金-の あったけど
 これは、このとても強かった牛も、痩せる (ft.痩せている) 牛も、牛へ生まれる

前は人間だったが、この太る (ft.太っている) 牛のととても強い牛は、この痩せる (ft.痩せている) 牛へ、人間に生まれている頃に、借金があったけど、

45. ~-ti:nu kutu-kara si:-du, munu: qsī: pītu-Nke: nare: mi:L-badu,
 -との こと-から して-ぞ もの-を 知る 人-へ 習って みると
 ~ということからして (奇妙だったのだ)、ものごとを知る (ft.知っている) 人へ習
 って (ft.伺って) みると、

4) 反復的な動き；繰り返される動きや習慣的な動作を表す用法である。非アクチュアルな用法であるが、完成相・終止形と同じく、テンスと完全に無関係ではない。

46. Mme jamuiN, “piNna munu aNsi:-du, na:-ga tiN-tu
 もう 止む得ぬ 変な もの そのように-ぞ 自分-が 天-と
uL nu:L sī: tubi-gīM-ju, nusumari: ne:N, satunusisaN”-ti:
 下り 上り する 飛び-着物-を 盗まれて しまった{ない} 里主サン-と
 Mme, qsari:-du,
 もう 申し上げて
 もう止むを得ない (と)、「奇妙なこと (に)、このように、自分の天と (地上を)
 下りたり上ったりする飛び着物を、盗まれてしまった、里主サン」と、もう申し上
 げて、

47. kamisori-u uL-ga aLkī micī-N tati: ucuki: ukī-tika:-du, bata-u
 剃刀-を それ-が 歩く 道-に 立てて 置いて おいたら-ぞ 腹-を
 bari: sīni-taL-ti:.
 割って 死んだ-と
 剃刀をそれ {note.犬} が歩く道に立てておいたら、腹を割って死んだって。

5) 一般的なコトガラ；完成相・終止形と同じく、非過去形に限られた非アクチュアルな用法である。連体形動詞が示す動きは、被修飾名詞の示すコトガラの「潜在的な属性」(高橋1973: 115) として表されており、〈個別的な時間〉が捨象されている。

48. unu, funi agiL kikai-nu ju.↗
 その 船-Ø 上げる 機械-の よ
 その、船 (を) 上げる機械の (ある家だ) よ。

49. agu, qva-ga kuruma-gama ure:, nu:L munu ara-N sja:↗
 [感] あなた-が 車-[指小]-は それ-は 乗る もの ではない さ
 あら、あなたの車はそれは、乗るものではないでしょ？

50. unu aLki micī-nu ho:ko:cigai-ba si:, Mme ikī-gumata-nu micī
 その 歩く 道-の 方向違い-(を)ば して もう 行く-[当然]-の 道
 ara-N-gutu,
 ではなくて
 その歩く道の方向違いをして (≠帰り道を間違えて)、(家に帰るときに) 行くはず
 の道ではなくて、
51. aNtidu niwa-N, iqtaN-bakaL-nu saNtu:ba cuqfi: wa:riqti:,
 そして 庭-に 一反-ばかり-の (屋敷内の)貯水池-をば 作り なさって
 uL-Nka mizū: tamarasiti:-du, koi-o, koi-o cukanu: munu-ti: ju,
 それ-に 水を 溜まらせて-ぞ 鯉-オ 鯉-オ 飼う もの-と よ
tanusuM munu: si: wa:L-taL-ti.
 楽しむ もの-を し なさった-と
 そして庭に、一反ぐらいの貯水池を作りなさって、それに水を溜まらせて、鯉ヲ飼
 うものとね、楽しむものとしなさった (≠楽しみなさった) って。

また、その脱時間化が進むと、連体形動詞と被修飾名詞の組み合わせは複合名詞的に
 ふるまうようになる (例52, 53)¹³。また、複合名詞的とまではいかない場合でも、動作
 (変化) 性が薄まり、規定語的にふるまう連体形のシタによく似てくる (例54, 55)。
 なお、2. で、弱変化タイプの完成相・連体形が、その表す文法的な意味によって現れる
 形式が異なることを述べたが、「異形型」(表2) をとっている用例では、この、脱時間
 化の進んだ〈一般的なコトガラ〉の意味が表されている場合が多い。

52. junagatu, izu tuLga ikiqti, baqsi munu-nu aL-ba, “tau
 夜 魚-Ø 採りに 行って 忘れ(る) もの-の あるので 誰
 arabaM iki: turi: ku:”-ti: jarasī-badu,
 であっても 行って 取って 来い-と やらす-と
 夜、魚(を) 採りにいって、忘れ(た) ものがあるので、「誰でも(いいから) 行
 って取って来い」とやらすと、
53. Mme jukuti: ucukiqti: Nne:ka-kara, gasu-ti ki:-taL-ci:-badu,
 もう 横手(に) 置いて 真中-から [擬態語]-と 切った-[引・推]-ので
 unu ba:-N, unu sibuL-kara-nu, idi mizi-nu, kanu,
 その 場合-に その 冬瓜-から-の 出(る) 水-の あの
 qvata: mi: mi:L sja, kanu upu-ka:-ti.
 あなたたち-は 見て みる さ あの 大-川-と
 もう横手(に) 置いて、真ん中からガスって切ったらしく、その時、その冬瓜の中

からの出 (た) 水が、あの、あなたたちは見てみるでしょ。あの太川って。

{note.天の川のことを指している}

54. uL-ja M: na p̥itu to: ri ja: susju-dataL, e: sini-du
それ-は 皆 人-Ø 倒れ(る) 飢饉-ぞ-であった [間] 死(ぬ)-ぞ
tus̥i-dataL-ti:.

年-ぞ-であった-と

それは人(が)皆倒れた飢饉だった、死んだ年だったって。

55. asjugadu mutunuse: kau nus̥i-Nke:-nu, uqka-nu-du kanagai-kara
だけど 元主-は 買(う) 主-へ-の 借金-の-ぞ 昔-から
a-taL-gi munu.

あった-気 もの

だけど元主は(その牛を)買った主への、借金が昔からあったらしい。

3-2 完成相過去・連体形

- 1) 実現した動き；〈基準時点以前＝過去〉のテンス的意味を表す、アクチュアルな用法である。その用例の多くは絶対的なテンスであるが、述語動詞が過去形の場合、ダイクティックな時間名詞などが文中になれば、相対的なテンスとの区別がつきにくい(例58)¹⁴。

56. jubi jubi kiki-ta:L panas̥i:-ti-du bareqra:.
タベ タベ 聞いた 話-を?-と-ぞ 笑っている-よ
タベ聞いた話って笑っているよ。

57. qfa-nu fa:-ti: subadu, unu fu: munu-Nka:, mus̥i-nu Mme-nu
子-の 食おう-と すると その 食(う) もの-に-は 虫-の [Pl.]-の
baki: buL. asjugadu, “Mma-ga kiM-kara Ndasi: wa:L-taL,
わいて いる だけど 母-が 心(肝)-から 出し なさった
bakari-nu munu ari:”-ti:, sa:ti: fe:qti:.
別れ-の もの だから-と [擬態語] 食って

子供が食べようとする、その食べ物には虫なんかがわいている。だけど、「お母さんが心から出しなされた、別れのものだから」と、一生懸命食べて、

58. sjo:gacue:gu-mai, sjeNta:-N-kara muti: ki-taL munu turasi: ite
[歌謡名]-も センター-に-から 持って 来た もの-Ø 取らせた [?]
oba:-N nara:si-ti.

オーバー-に 習わせ-と

「正月エーグ」も、センターから持ってきたもの(を)取らせた(あげた)。イテ

おばあさんに習わせなさい (ft. 教えなさい) って。

- 2) 基準時点に関わる以前＝過去の動き；〈基準時点以前＝過去〉に行われた動きが、何らかの形で基準時点＝現在にまで関わっていることを表す（＝「パーフェクト的な意味をもつ」須田2005：16）、アクチュアルな用法である。基準時点が発話時＝現在である場合を除いて、主に、述語動詞を基準とする相対的なテンスが表される。

59. iki Nga-ti: siḡadu unu, u:sjazusju:-ga sjaṣikomi wa:L-taL
 行って 抜こうと するけど その ウーシャズ主が 差し込み なさった
ki:-ja Ngari-N.
 木-は 抜けない

行って抜こうとするけど、その、ウーシャズ主が差し込みなさった木は抜けない。

60. du:-ga cuqfi-taL ja:-ju jakuniN-nu Mme-nu, pikiagi: tubī-taka:
 自分{胴}-が 作った 家-を 役人-の [Pl.]-の 引き上げて 行ったら{飛んだら}
 kiduku ari:-ti:, unu ja:-nu para-u, uma kuma kizu: cuki:,
 気(の)毒 だから-と その 家-の 柱-を そこ ここ 傷-を つけて
 自分が作った家を、役人たちが（調べて分不相応だと）引き上げていったら気の毒だからと、その家の柱をあちこち傷をつけて、
61. unu, jo:zi si-ga ki-taL dusē: tati: iki:,
 その 用事-Ø しに きた 友達-は 立って 行って
 その、用事をしに来た友達は立って行って、

だが次の用例では、補助動詞/kitaL/（～来た）によって、以前＝過去の動作の基準時点への関わりは完全には失われていないものの、被修飾名詞の位置に現れている動作主体が個別的でないためか、動作性が弱く、4)の〈基準時点における状態〉の意味に近づいている。

62. unu aparagi sjugaL-ba si: kesjo:-ba si: kī-taL miduM-ja M:na
 その 美しい 装い-(を)ば して 化粧-(を)ば して きた 女-は 皆
pamiLru-gadu atara-N.
 はめるけど 当らない
 その美しい装いをして化粧をしてきた娘（たち）は皆、(靴を)はめるけど当らない {note. うまくはまらないからその靴の持ち主ではない、ということ}。

- 3) 限界に到達した動作；連体形動詞の表す動作・変化が、基準時点により近い以前＝過去（直前）に位置づけられている場合、このテンス・アスペクト的な意味が表される。この用法は、基準時点となる述語動詞の示す動作の主体と、連体形動詞の示す動

作の主体が同一で、被修飾名詞によって差し出されている場合に限られるだろう。なお、文の終止の位置では、〈限界に到達した動作〉の意味は、主に「直前過去形」（表1）によって表される¹⁵。

63. ati aparagisjaN, kuL-u: mi:-taL si:niN-nu Mme:,
 とても 美しくて これ-を 見た 青年-の [Pl.]-は
kairi:-ja sinisini si: buL-ba,
 返って-は 死に死に して いたので
 あまりに美しいので、この子を見た青年たちは、(ひっくり) 返っては死んだりしていたので、
64. unu kaci-taL si:niN-nu umukutu muno:, irisuzuja:-nu
 その 勝った 青年-の 知恵{思う事} もの-は イリスズヤー-の
muku-N naL-taL-ti:.
 婿-に なった-と
 その勝った青年の知恵者は、(約束通り) イリスズヤーの婿になったって。

4) 基準時点における状態；基準時点にまで関わる以前＝過去の動作・変化ではあるが、その成立した動作・変化が、「時間的に遠く、異場面において生じたもの」（須田2005：17）である場合、「その動作のプロセスの側面はきえてしまって、動作の結果である状態の側面だけがうかびあがって」くる（高橋1973：123）。動作（変化）性は希薄であり、被修飾名詞の示すコトガラの属性を表す非アクチュアルな用法となっている。

65. “kunu karasi-taL ziN-ju muti:-du baN-ja sima-Nke: kairi-gumata
 この 借らした 銭-を 持って-ぞ 私-は 島-へ 帰る-[当然]
aLru-gadu, ziN-ju para:-N-gutu piNgi: buL, para:-maN-ti:nu
 であるけど 銭-を 払わないで 逃げて いる 払わない-との
kimuci-kara sja:mi:-ti basjaqzi:,
 気持ち-から だろう-と 怒って
 「この（あなたに）貸したお金を持って私は島へ帰るはずだけど、（あなたは）お金を払わないで逃げている。払いたくないという気持ちからだろう」と怒って、
66. mata, ka:sidai-ju uki: paku-Nka izi: ukiqti:, atukara mi:-tika:
 また 菓子代-を 受けて 箱-に 入れて おいて 後から 見ると
- unu ziN-ja, ziN-ja ara-N-gutu kabü: jakī-taL karapai-du atari:,
 その 銭-は 銭-は ではなく 紙-を 焼いた 灰-ぞ であったから
 また、菓子代を受けて箱に入れていて、後からみると、そのお金は、お金ではなく

て、紙 {note.紙銭のこと} を焼いた灰だったから、

なお、存在動詞がこの〈基準時点における状態〉を表す場合は、アクチュアルである。

67. uma-N a-taL kabaN-ja Nda.

そこ-に あった 鞆-は どこ

68. kīnu: a-ga sjuba-N bu-taL pīto:, ba-ga uqtu.

昨日 私-が 傍-に いた 人-は 私-が 弟or妹

昨日私の傍にいた人は、私の弟（だ）。

5) 反復的な動き；くり返される動きや習慣的な動作を表す、非アクチュアルな用法である。用例は僅かだが、被修飾名詞の示すモノゴトの属性を表す用法の1つと考えてよいだろう。

69. “aNsi:-du, ka: ozi:-ga, uNsjuku, M:na jo: munu-mai

そのように-ぞ 貧しい おじ-が すごく 皆-Ø 弱い 者-も

micugi: wa:L-taL ozi:-ga, nakunari: buL”-ti:, Mme iki: reNraku

貢ぎ なさった おじ-が 亡くなって いる-と もう 行って 連絡

sī-taL-cu:-badu,

した-[引・推]ので

「そのように、貧しいおじが、とても、皆（に）、弱い者（に）も貢ぎなさった（note.貢ぎなさっていた）おじが、亡くなっている」と、もう行って連絡したらしく、

3-3 継続相・連体形

1) 動作の過程の継続；〈基準時点（同時）＝現在〉の継続的な動作を表す、アクチュアルな用法である。述語動詞がない場合やダイクティックな時間名詞がある場合は絶対的なテンスが、そうでない場合は相対的なテンスが表される。また、継続相・終止形と同じく、無限界動詞と主体動作・限界動詞はその動作の継続を、主体動作客体変化・限界動詞は「限界に方向づけられた過程の継続」をそれぞれ表す。

○動作の継続

70. “ure:, kunu, nara-ga funi-u kugi: buL īzaku-ni:, sjuba-u

それ-は この 自分-が 舟-を 漕いで いる 櫂-で 傍-を

tatakī-badu no:L”-tu wa:L-ba,

叩けば 直る-と 仰ると

「それ {note.舟への海水の浸水を指す} は、この、自分（≠あなた）が舟を漕いでい

る權で、(舟の) 傍を叩けば直る」とおっしゃると、

71. pītu-nu mi: buL tukuru-N-ja mata kure beNzjo:-ja sju-N, -ti i-badu,
 人-が 見て いる 所-に-は また これ-は 便所-は しない-と 言う
 人が見ている所では、またこれは便所はしない、と言うと、

○限界に方向づけられた過程の継続

72. we: nama-game cufari: buL tukuro:.
 [間] 今-まで-は 作られて いる 所-よ
 ほら、今もまだ作られている所よ。{note.何か工事が行なわれているということ}

但し、継続相・完成相と同様（注8参照）、「対象における変化が、ある時点に一挙に実現するような動作をさししめす動詞」の場合は、「限界到達後に対象にのこる状態の維持」が表されていることが多い。

73. “kure: nai-nu naL ki:-nu nai. we:, kuL-u: muqtui ja:-Nke:
 これ-は 実-の なる 木-の 実 [間] これ-を 持って 家-へ
 ikī-tika:, mīci-nu katafuta-N qfa-nu Mme-nu, naugara:-nu sjaku
 行くと 道-の 片方-に 子-の [Pl.]-の 何やら-の 程度
 tabariqte:, unu qva-ga muti: buL munu: buqsa:, buqsa:-ti
 集まって その あなた-が 持って いる もの-を 欲しい 欲しい-と
M:na acumari: kī: pazi aL-ba, {省略}”
 皆 集まって くる はず であるから

「これは実のなる木の実。これを持って家へ行ったら、道の片方に子供（^{ft}小人）ら
 が何やらの程度（^{ft}たくさん）集まって、そのあなたが持っているものを欲しい、
 欲しいと皆集まって来るはずだから、{省略}」

2) 変化の結果の継続；継続相・終止形と同じく、主体の変化を表す限界動詞によって表されるアクチュアルな用法である。〈基準時点（同時）＝現在〉において、その変化の結果の状態の継続段階にあることが表される。やはり、述語動詞やダイクティックな時間名詞の有無などによって、絶対的なテンスか相対的なテンスかが異なる。

74. kaNbo:-ti nini:L uqtu-N nicufusjuL numasja-zī:.
 感冒-と 寝ている 弟or妹-に 熱薬-Ø 飲まそう
 風邪と寝ている弟に熱薬（を）飲ませよう。
75. kama-N bi: buL pīto: tau-ga:-ti: kiki:-taL jo:.
 あそこ-に 座って いる 人-は 誰-か-と 聞いていた よ
 あそこに坐っている人は誰かと（私に）聞いていたよ。

3) 基準時点における状態；感覚動詞や動作主体の生理・心理的な状態を示す動詞などによって表されるアクチュアルな用法である。また、継続相・終止形と同じく、存在動詞/aL/の継続相/ari:L/によっても表される（例79）。

○動作主体の感覚的な状態（感覚動詞）

76. aL pī: jami: buL uja: qfa-u: abiri:-du tu:zuki-taL-ti:.

ある 日 病んで いる 親-は 子-を 呼んで-ぞ 指示した-と

ある日、病んでいる（~~tt~~病気の）親は、子供を呼んで言ったそうだ。

○動作主体の生理・心理的な状態

77. aL pītu-nu-du:, aL hoNja-Nke: hoN ko:ga-ti ikiqte:,

ある 人-の-ぞ ある 本屋-へ 本-Ø 買いに-と 行って

hoNdana-u mi:L-badu, nara-ga uNsjuku-N nuzumi: buL hoN-nu

本棚-を 見ると 自分が うんと-に 望んで いる 本-の

ari:-taL-ti:.

あった、[融継]-と

ある人が、ある本屋へ本（を）買いにと行って本棚を見ると、自分が大変に望んでいる本があったって。

78. karijusu pīkazu-nu aL pī:-nu sje:kaN, pama-Nke: touka:

おめでたい 日数-の ある 日-の 早朝 浜-へ 1 人

isjugi: buL, junsuu: cibi-kara abiL pītu-nu buL.

急いで いる ユヌス-を 後ろ{尻}-から 呼ぶ 人-の いる

ある日の早朝、浜へ1人急いでいるユヌスを、後ろから呼ぶ人がいる。

○存在動詞 (/aL/)

79. kuma-N ari:L hoN-ja M:na, ba-ga munu do:

ここに ある, [融継] 本-は 皆 私-が もの よ

ここにある本は、全部私の（だ）よ。

また、以下の用例のように、その状態にある前の変化が問題とならない、あるいは変化そのものが無い場合や（例80）、動作性が失われている場合（例81）、その連体形動詞は単に〈基準時点における状態〉の意味を表すようになる。

80. kuruma-mai-du ikī-ti i: dara:na kaNsi: kiqti: uNsi:

車-も-ぞ 行く-と 言う だろうね あのように 来て そのように

magari:L munu ju.

曲がっている もの よ

車でも行く (ft.行ける) って言う (ft.言っていた) よね、あのように来て (ft.行って)、
そのように曲がっているもの (ft.所) よ。

81. kunu, ami-nu kutu:, ami-nu kutu: kakai:L tukuru:,
この 雨-の こと-を 雨-の こと-を 書かれている 所-を
kakai:L buNsjö:-nu tukuru: Mme mafuda: teisei-ba si:,
書かれている 文章-の 所-を もう マフダ-は 訂正-(を)ば して
この雨のことを、雨のことを (ft.が) 書かれているところを、書かれている文章の
ところを、もうマフダは訂正して、{note.勝手に書きかえたということ}

- 4) 反復的な動き；繰り返される運動や習慣的な動作を表す非アクチュアルな用法である。

82. unu ju:ki-nu aL bikiduM-ja, jamamicü: aLki: bu-taL-ti:.
その 勇気-の ある 男-は 山道-を 歩いて いた-と
jukuefumei-ba sumi: buL Nzja-u keNkju:si: tami-N ju.
行方不明-(を)ば させて いる やつ-を 研究する ために よ
その勇気のある男は、山道を歩いていったって。行方不明をさせている {note.村人を
行方不明にしている、ということ} やつを研究するためによ。

83. aM-ju sju:ri, “aM-ju cuqfe:”-ga i: na. aM-ju cuqfe: wa:ri:L
網-を 修理 網-を 作って-ガ イー ナ 網-を 作り なさっている
naifu-gama, kunu naifu:,
ナイフ-[指小] この ナイフ-を
網を修理、「網を作って」ガイナーナ。作りなさっているナイフ、このナイフを、

3-4 継続相過去・連体形

- 1) 動作の過程の継続；無限界動詞と主体動作・限界動詞、主体動作客体変化・限界動詞によって表される、アクチュアルな用法である。主に、〈基準時点以前＝過去〉において、前者はその動作が継続していたことを、後者は「限界に方向づけられた過程の継続」の段階にあったことを、それぞれ表す。

○動作の継続

84. cjawaN-nu ne:N-niba, du:ta-ga numi: bu-taL cjawaN-ju
 茶碗-の ないから 自分{胴}たち-が 飲んで いた 茶碗-を
migakasi:, pa:-gama-ni: faMburi: wa:L-badu,
 綺麗にして{磨かして} 歯-[指小]-に 噛み折り なさると
 (新しい) 茶碗が無いので、自分たちが飲んでいた茶碗を綺麗にして(差し上げよ
 うと)、歯で(茶碗のふちを)噛み割りなさと、

85. ja:-nu kubiqta-N naka-nu jo:su: mi: bu-taL tura:, kunu
 家-の 壁-に 中-の 様子-を 見て いた トラ-は この
panasü: kikiqti:,
 話-を 聞いて
 家の壁に(くつついて)中の様子を見ていたトラは、その話を聞いて、

○限界に方向づけられた過程の継続

86. paLmicí-Nke: kí:-badu, ta:-Nka fusja-u turi: bu-taL pjakusjo:-nu,
 畑道-へ 来ると 田-に 草-を 取って いた 百姓-の
qsa-N-gutu, duru daL fusja: micí-Nke: jaL-badu, nu:ma-nu
 知らないで 泥-Ø 垂れ(る) 草-は? 道-へ 投ると 馬-の
bata-N atari:, duL daL-ba sími:,
 腹-に 当たって 泥-Ø 垂れるの-(を)ば させて
 (御主が)畑道へ来る(♫行く)と、田で草を取っていた百姓が、(御主が来たのを)
 知らないで、泥(の)垂れた(♫泥だらけの)草(を)道へ投げて、(それが)馬の
 腹に当たって泥だらけにして(しまい)、

また、「対象における変化が、ある時点に一挙に実現するような動作をさししめす動詞」の場合は、やはり、「限界到達後に対象にのこる状態の維持」が表されていることが多い。なお、次の例87では、〈基準時点以前＝過去〉における〈状態の維持〉ではなく、「終止形のさしだす過去の動作と同時的である継続的な動作・状態」(須田2005:19下線引用者)が表されている¹⁶。なお、上の例85も、〈同時的な動作の継続〉を表しているようである。

87. agaitaNdi:-ti uduruki:, muti: bu-taL izjara-si: tura-nu zju:-ja
 [感]-と 驚いて 持って いた 鎌-で トラ-の 尾-は
nagíkisi:,
 薙ぎ切った
 あれまあと驚いて、持っていた鎌でトラの尾は(♫を)薙ぎ切った。

2) 変化の結果の継続；主体の変化を表す限界動詞が表すアクチュアルな用法である。

〈基準時点以前＝過去〉において、その変化の結果の状態の継続段階にあったことが表される。

88. kanu miNna-N-ja, we: hoNto:-N unu funi-nu bari:taL tukuru-nu
 あの 水納-に-は [間] 本当-に その 舟-が 割れていた ところ-の
 Mta-ti: aLro:,
 土-と あるよ
 あの水納には、本当にその舟が割れていた (≠割れて沈んでいた) ところの土と (い
 うのが) あるよ、

89. jana:cjagama usjumi: mi: buL-badu, nara-u kī:-nu cuki-taL-ga
 こっそり かがんで 見て いると 自分-を 気-の ついた-か
 ge:ra, waoN-ti tatiqti:, be:be:be:-ti: baNkiqti:, jama-Nka-Nke:
 らしい [擬態語]-と 立って [擬声語]-と 鳴いて{喚いて} 山-に-へ
 pītu-kara pari: tubi-taL-cu:-badu, juka:ra-u si: mata
 1 匹 走って 行った{飛んだ}-[引・推]-ので 横-を して また
 cibi-u si: bi: bu-taL ikimusi-nu Mme-mai, M:na ciri:
 後{尻}-を して 坐って いた 生物-の [Pl.]-も 皆 散って
jama-Nka-Nke: piNgi: tubi-taL-ti:.
 山-に-へ 逃げて 行った{飛んだ}と
 こっそりかがんで見ていると、自分を (≠に) 気がついたのか、ワオンと立って、
 ベーバーベーと鳴いて、山へ1匹走っていったらしく、横をしてまた後ろをして (≠
 横向きにまた後ろ向きに) 坐っていた動物らも、皆散って山へ逃げていったって。

3) 基準時点以前＝過去の状態；過去の存在動詞/ataL/の継続相/ari:taL/によって表される、アクチュアルな用法である。また例91も、具体的な動作ではなく、「看護婦だった」という主体の〈過去の状態〉の意味（コピュラ的な意味）を表していることから、この用法に含まれる。

90. uma-N ari:-taL kabaN-ju Nda-Nke: muti: iki-taL-ga.
 そこ-に あった, [融継] 鞆-を どこ-へ 持って いった-か
 91. ××, kanu: kaNgofu: si:-taL qfa-nu, miduMqva-tu.
 [屋号] あの 看護婦-を していた 子-の 女の子-と
 [屋号] (の家の)、あの看護婦をしていた人の女の子 (≠娘) って。

4) 反復的な動き；〈基準時点以前＝過去〉に繰り返された動きや習慣的な動作を表す、

非アクチュアルな用法である。

92. kunu tujume-nu ju: bai-ba si:-taL kaNdatuja:-nu miduM:-ja
 この 豊見親-の 夜這い-(を)ば していた カンダトゥヤーの 女-は
 tura-nu pa urazja-Nke: Mme paLru: si: gusiN-ba ne:ri
 寅-の 方位-Ø 裏座-へ もう はだか?-を して 陰門-(を)ば 向けて
 nini:, nini: buLru-Nke:-du¹⁷
 寝て 寝て いるの-へ-ぞ
 この豊見親が(かつて)夜這いをしていたカンダトゥヤーの娘は(ft.が)、寅の方向
 の裏座へもうはだかで(?)陰門を向けて寝て、寝ている(ところ)へ、

4. 連体形のテンス・アスペクトの体系

以上、文の連体の位置において、それぞれの形式の動詞が実現するテンス・アスペクト的な意味・用法を記述してきた。そのテンス・アスペクト的な意味は次のようにまとめられる。

	(アクチュアルな用法)	(非アクチュアルな用法)
a. 完成相・連体形；	〈実現する動き〉 〈継続的な動作・状態〉 〈基準時点における状態〉	〈反復的な動き〉 〈一般的なコトガラ〉
b. 完成相過去・連体形；	〈実現した動き〉 〈基準時点に関わる 以前＝過去の動き〉 〈限界に到達した動作〉	〈基準時点における状態〉 〈反復的な動き〉
c. 継続相・連体形；	〈動作の過程の継続〉 〈変化の結果の継続〉 〈基準時点における状態〉	〈反復的な動き〉
d. 継続相過去・連体形；	〈動作の過程の継続〉 〈変化の結果の継続〉 〈基準時点における状態〉	〈反復的な動き〉

連体の位置の動詞のテンス・アスペクト的な意味は、基本的に、文の終止の位置の動詞のそれに対応するものであると言ってよいだろう。だが、両者の間の異なる点も、いくつ明かになっている。

まず完成相について、非過去形 (a) は〈基準時点以後＝未来〉、過去形 (b) は〈基準時点以前＝過去〉の動きを「まるごとのすがたでさしだす」(高橋他2005: 80)¹⁸というテンス・アスペクト的な意味を、それぞれその基本的な用法としている点は終止形動詞

と同じであるが、〈限界到達（動作の発生）〉という動きのある段階をさしだすことはできない（bの〈限界到達〉はやや特殊なものである（注15参照））。だが、完成相連体形動詞は、完成相終止形動詞には見られない、〈基準時点（同時）＝現在〉に関わる継続的な動きの意味を表すことができる。また、文の連体の位置で与えられる“名詞を修飾する”という役割によって、bの〈基準時点における状態〉を表す用法は「非修飾名詞の示すコトガラ」の属性を表す」という非アクチュアルな意味となっている。これは、aの脱時間化の進んだ〈一般的なコトガラ〉の意味と共に、文の連体の位置の動詞が「動詞らしさをうしなう」ことがあることを示している（高橋2003：269）。

継続相は、非過去形（c）、過去形（d）とも、終止の位置の動詞の用法と大きくは変わらない。ただdは、〈基準時点以前＝過去の動作の継続〉ではなく、基準時点と〈同時的な動作の継続〉という、テンス的に終止形動詞とは異なる用法も示していた。但しこれは、bの〈限界到達〉と同様、やや特殊な用法である。

そして、これらの形式は、次のように体系化されるだろう。

テンス アспект		非 過 去			過 去
		同形型	異形型	推量形型	
完成相		kakī ス(シ)	(mi: シ)	kakazī: セ(ム)	kakitaL シタリ
継続相	[融合形]	kaki:L シアリヲリ	—	—	kaki:taL シアリヲリタリ
	[分析形]	kaki: buL 〃	—	—	kaki: butaL 〃

表 3 多良間方言連体形のアспект・テンス体系表（代表形kakī「書く」）

なお、完成相非過去形の異形型は弱変化タイプの動詞にのみ現れる形式であり、脱時間化した〈一般的なコトガラ〉を主に表す。表 3 では/mi:L/（見る）に代表させた。また、推量形型は完成相非過去形にのみ現れ、〈基準時点以後＝未来に実現する動き〉の意味を実現する。

¹ 以下に挙げている用例は、筆者のおこなった臨地調査(1999. 8～2000. 10, 2001. 8～2002. 2) とその補足調査から得られた音声資料の他、古老の語る「昔話」を採集した『多良間の民話』（多良間村役場1981）と、その基となった音声資料の3種を中心に用いている。

² 拙論2005から少し改めている。表 1 について、完成相の ri 語尾形と m 語尾形、また

アリ過去形を1つの枠内に収めているが、それは、これらが同一の語構成を持つ異形態であることをあらわすものではない。形式の違いによるテンス・アスペクトの意味の差異の見られないことによる。なお、完成相の **ri** 語尾形と **m** 語尾形について、これらの形には、意志をあらわす ***mu** (あるいは ***mo**) の後接の有無による、陳述性の違いが見られる (拙論2002より)。

- ³ これらはいわば同一語の異形態であり、表1でも、本当ならば横に並べて示されるべきものであるが、スペースの関係により縦に並べて配置している。また、継続相に **m** 語尾形は現れないことも、ここで注記しておく。

- ⁴ ただし、/**mi:L**/ (見る, 見える) など、2音節の弱変化タイプ動詞の継続相には、原則的に分析形しか現れない。その想定される融合形継続相は完成相と同音形式であり、両者の混同を避けるため、分析形のみが用いられていると考えられる

- ⁵ なお、示すのはその全ての意味・用法ではなく、基本的なものと、連体形のテンス・アスペクト的な意味に関わるものに限った。(また、拙論2005は考察が不十分な点が多く、ここではそれらを改めている。) 示されたものの他にも、例えば完成相非過去形は、〈限界に到達した動作〉を表す用法なども示している。なお *cf.* では、〈基準時点以前＝直前〉のテンス的意味が実現されている。

cf. *agai, nu:-nu, usi-nu-du ki:L na ure:.* 〈限界に到達した動作〉

[感] 何-の 牛-の-ぞ 蹴る ね それ-は

わあ、何、(今) 牛が蹴る (t.蹴った) ね? それは。

- ⁶ /**iki**/ (行く) は、程度を表す状況語によって「限界」づけられることで、1) の〈限界に到達した動作〉の意味を表すようになる。

cf. “*ida-gami-ga ikiqtaL-ga.*” “*naNri-pudu Mme ikiqta.*”-*ti: i:-badu,*

どこ-まで-か 行った-か 何里-ほど もう 行った-と 言う

「どこまで行ったか?」「何里ほどもう行った」と言う、

- ⁷ 多良間方言の継続相も、共通語のシテイルと同じく、「パーフェクト的な意味」を実現する用法をもっている。だが本研究は「アスペクト」と「パーフェクト」を別カテゴリーと捉える立場をとっており、〈パーフェクト〉を継続相のテンス・アスペクト的な意味の1つに含めていない。

- ⁸ 但し、「対象における変化が、ある時点に一挙に実現するような動作をさししめず動詞」の場合は、「限界到達後の段階」、この場合は「限界到達後に対象にのこる状態の維持」が表されていることが多い (須田2003: 26)。

cf. “*a: ba-ga-du Nna-u muti: buL, de:’-ti, we:si: wa:L-tikara:-du,*

[感] 私-が-ぞ 縄-を 持って いる [感]-と 差し上げ なさるので-ぞ

「あー私が縄を持っている。さあ」と差し上げなさると、

- ⁹ 拙論2002では、強変化タイプに属する動詞を、その動詞が持っている語幹のタイプによってさらに下位分類している (A~D)。Aは基本語幹のみを持っており、A'からDは、基本語幹の他にそれぞれ異なる「変わり語幹」を持っている。

- ¹⁰ 塩川と仲筋では、連母音/au/の融合現象の有無による語彙的な対立が多少見られる。「ハ行四段活用動詞」に相当し、その基本形の古形末尾が*(nig) awiのように推定される語も、かつてはその音韻対立を示していたと考えられるが、現在はDタイプへの統合が進み、/kau—ko:/ (買う) などを除いて、その対立はほとんど解消されつつある (拙論2004より)。
- ¹¹ また、拙論2002では、本来は強変化タイプに属するはずの/qsī:/ (知る) も、その活用に変化が生じていることから、便宜的にこのタイプに位置付けられている。
- ¹² また、この用法の完成相・連体形は、〈当然〉や〈義務〉、〈強い推量〉といったムード的意味を表す/-gumata(-nu)/を伴って現れることも多い。

ex. umukutu muno:, irisuzuja:-nu akaL-u: mi:tui, “kanu, tu:L-nu
知恵{思う事} もの-は イリスズヤー-の 灯-を 見て あの ランプ-の
sīta-N-ja, ba-ga miduM naL-gumata-nu, kaL-ga-du buL”-ti:
下-に-は 私-が 妻{女}-Ø なる-[当然, 推量]-の あれ-が-ぞ いる-と
unu miduM-nu ka:gi-u kanamaL-Nka ukabi: butui,
その 女-の 顔{影}-を 頭-に 浮かべて いて
知恵者はイリスズヤーの灯を見て、「あのランプの下には、私の妻になるはずの、あの人がいる」と、その女の顔を頭に思い浮かべていて、

- ¹³ 以下の例 (cf.) のように、非修飾名詞に連濁が生じている場合は、完全に複合名詞として扱うことができるだろう。ここで挙げている他の用例についても、特に、例52の/baqsi munu/など、完成相・終止形と異なる形をとって現れているものは、1つの複合名詞として扱うべきなのかもしれない。だが、この「異なる形」の連体形動詞は、常に、非時間的な意味を表しているわけではないことから、本稿では便宜的に、連濁現象の見られる場合を除き、連体形動詞と名詞のくみあわせとしてこれらを捉えている。

cf. “sjudaci-zīma-N pairu.” 「育ち島で栄えろ」[諺]

育つ-島-に 栄えろ

- ¹⁴ なお、須田2005は、「終止形が過去形の場合、連体形のシタは、終止形のさしだす動作に先行する動作というより、発話時を基準とした過去の動作をさしだしていると解釈したほうが自然である」と述べ (p17)、例58のような文も、絶対的テンスを表すものと捉えている。
- ¹⁵ この〈限界到達〉の用法は、文の連体の位置と終止の位置とでは、その形式以上の大きな違いが見られる。すなわち、前者はいわゆる“（語りの）地の文”でのみ、そして後者はいわゆる“会話の文”でのみ、それぞれ、その意味の実現が可能であるということである。須田2005でも、連体形シタの表す〈限界到達〉の意味は、「語りの連体」という、「少し異なる連体形の用法」として示されている (pp19-20)。
- ¹⁶ この〈同時的な動作・状態の継続〉の意味は、いわゆる“（語りの）地の文”でしか実現されないものである。須田2005では、3-2の完成相過去・連体形の〈限界到達〉

の用法の場合と同じく（注15参照）、「語りの連体」として扱われている（p19）。

- ¹⁷ 長浜数子1986「口承文芸」（『沖縄民俗』24：77-101，琉球大学民俗研究クラブ）より。原文は以下の通り。本文では、本稿の体裁に合わせて表記を改めた。

“kunu tujumenu ju:baiba ʃi:tal kandatuja:nu midum:ja turanupa
uradʒaŋke: mme palru:si: guʃimba ne:ri nini:, nini:bulruŋke:du”

「この豊見親がかつて夜這いをしていたカンドトゥヤーの娘が寅の方の裏座ではだ
かで陰門をさらして寝て、寝ているところに」（p85）

なお、/gusiN/（陰門）は平良方言語彙で、多良間方言では/pĩ:/と言う。また、/ju:bai/
という語は、「妾」というヒト名詞の意味で用いられることの方が多いようである。
よってこの用例も、「豊見親の妾をしていたカンドトゥヤーの娘」というように、主
体の、この場合は〈基準時点（同時）における状態〉の意味を表していると解すこ
ともできるが、本稿では長浜1986の記述に従った。

- ¹⁸ 須田2003はこの意味を、「全体的な事実の意味」と呼んでいる。

参考文献

- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 下地賀代子 2002 『宮古多良間島方言の基礎的研究』（千葉大学大学院2002年度修士論文）
- 2004 「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28：93-113，法政大学沖縄文化研究所
- 2005 「沖縄宮古多良間方言のアスペクトの体系」松本泰丈編『語彙と文法の相関』（千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書123）：53-78
- 鈴木 重幸 1979 「現代日本語の動詞のテンス」言語学研究会編『言語の研究』：5-59，むぎ書房 {鈴木1996『形態論・序説』所収：107-158}
- 須田 義治 2003 『現代日本語のアスペクト論』海山文化研究所
- 2005 「連体形のテンス・アスペクトについて」『沖縄大学人文学部紀要』6：15-24
- 高橋 太郎 1973 「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」『ことばの研究』4（国立国語研究所論集4）：101-132，秀英出版
- 2003 『動詞九章』ひつじ書房
- 高橋太郎他 2005 『日本語の文法』ひつじ書房
- 丹羽 哲也 1996 「ル形とタ形のアスペクトとテンス」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』48：703-740
- 1997 「連体節のテンスについて」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』49：295-330